

西小学校学力向上推進計画

令和5年度報告

1. 目標 児童一人一人の「確かな学力」を向上させ、「生きる力」を育む
～ 学校・家庭・地域・行政の連携をとおして ～

【学推の目指す児童像】

- ・主体的に学習に取り組み、主体的・対話的で深い学びができる。
- ・学びにむかう集団としての基本姿勢や生活習慣を身につける。
- ・基礎的な知識・技能を習得し、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を身につける。

2. 基本方針

- 1 県学力向上推進主要施策「学力向上推進プロジェクト5か年プラン・プロジェクトⅡ
～学びの質を高める授業改善・学校改善～」及び「伊江村学力向上推進要項」を踏まえ、本校の課題を解決するための取組や特色ある取組を推進する。
- 2 新たな時代へ対応するための「主体的・対話的で深い学び」の視点をもった授業改善を推進していくことで、自らの人生を主体的に切り開いていくことができる「確かな学力」の向上を推進する。
- 3 「授業改善」の取り組みを支える学力向上の取り組みとして、3つの視点「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」から、5つの具体的な方策を通して、授業改善・学校改善を推進し、本校児童に「新たな時代をつくるために必要とされる資質・能力」を育み、学力の向上を推進する。
- 4 県の施策「学力向上PPⅡ」をもとに、学校・家庭・地域・行政機関が一体となって具体的な取り組みを行い「確かな学力」の向上を推進する。

3. 推進のための視点

◎児童一人一人が生き生きと目を輝かせ、試行錯誤し、学び合い、うなずきがある授業の推進のためには

- 1 全ての児童を高めたいという教師の情熱
- 2 使命感による事前の教材分析・解釈に裏打ちされた指導力があってこそ成り立つ。

具体的な授業改善に当たっては、教師、児童、教材の3つの視点からこれまでの実践を見直し改善策を講じる必要がある。

視点1 「自己肯定感の高まり」

教師については、教材分析力や発問、板書、児童への接し方等の指導技術、資料・教具の効果的な使い方、児童の発達の段階に応じた指導方法の在り方など、授業構想力が基盤となる。

【教師の同僚性、OJTの活性化により推進していく】

視点2 「学び・育ちの実感」

児童については、自ら学び、自ら追究する学習態度の形成、発表や説明の仕方ノートの手書きなど、学習方法の習得、教具の使い方、児童相互の交流など、実践を通して学習に向かう態度を育成することが基盤となる。

【伊江島スタンダードを基軸に授業を展開し、学習面からの育ちの実感を見取る。（振り返りの充実）】

視点3 「組織的な関わり」

教材については、児童の実態や発達の段階、日常生活との関連や地域の実態に応じた教材開発、児童が学習に意欲的に向き合える内容や環境の整備、教材の配列の工夫など、全てに合致することが基盤となる。

【OJTの推進、校内研と連動したカリキュラムマネジメントの構築、積極的な地域人材の活用】

「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ（PPⅡ）」より

4. 取組の重点

授業の充実や授業改善を推進していくにあたって、本校の取組の重点項目を設定し、各教科や校内研修と連動し、学力向上の推進に努める。

◎共通実践事項 1

☆質的授業改善を基軸に「学びに向かう児童」の育成を図る。

【質的授業改善にむけて】

- ・毎時間の授業において「身につけさせたい力の明確化」(何ができるようになるのか)
- ・各教科の指導内容の吟味と指導方法の工夫(何を学ぶのか)(どのように学ぶのか)
- ・毎時間の授業における児童の「振り返り」から何が身についたのかを見取る。(何が身についたのか)→授業者自身の授業評価(身に付けさせたい力が身に付いているのかを確認する。→授業改善)

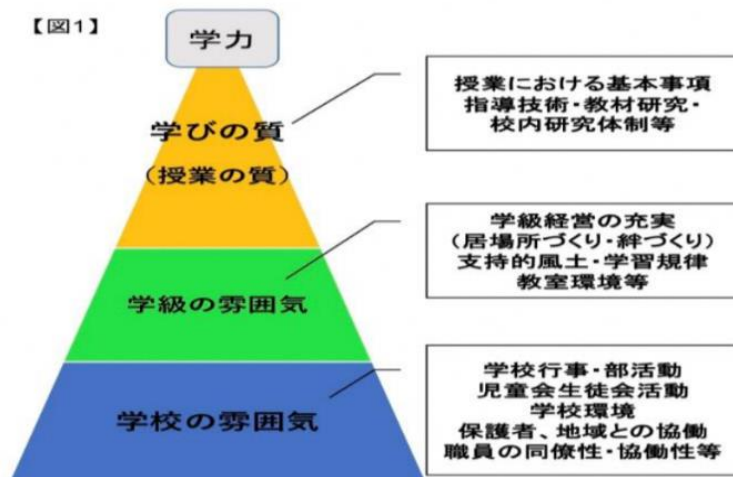
※伊江島スタンダードを通じた授業形態をとり、授業者の創意工夫を期待しつつ、「振り返り」を大切にしたり日常的な授業改善につなげる。

◎共通実践事項 2

☆毎日行われている教育活動の価値づけと方向性をそろえる。

1 自己肯定感の高まり	2 学び育ちの実感	3 組織的な関わり
<ul style="list-style-type: none"> ・縦割り班活動の充実 ・学習面からのアプローチ ・児童会活動を中心にした自治的な活動(児童のPDCAを支える) 	(知・技) ・授業改善 (思・判・表) ・縦割り班活動 ・交流学习 ・村内での体験学習(地域人材の活用) (人間性) ・個々の目標を見据えた行事の持ち方	<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善へ向けたOJTの充実 ・校内研修との連動 ・PDCAのC・Aの充実を図る
取組の重点項目	主な取り組み内容	推進の視点
①自己肯定感の高まり	【授業改善からのアプローチ】 ・伊江島スタンダード(学びあい・聴き合う授業)の推進。 ・「振り返り」を重点にした授業展開を行い、児童自身に「何が身についたのか」を確認させるとともに、自らの授業(身に付けさせたい力が身につけているか)の評価の指針とする。 ・各種調査(全国学調/到達度調査/県まなび)の分析を通して実態の把握に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ・PPⅡ ・国頭地区学推との連動 ・村学推/校内研修との連動 ・カリキュラムマネジメント
②学び・育ちの実感	・ESD(持続可能な開発のための教育)の視点を取り入れた、カリキュラムマネジメントを推進する。 ・同僚性を高め、OJTを推進する。(授業展開、宿題(課題)の出し方、ICTを活用した課題の提示や授業での活用法の模索など)	<ul style="list-style-type: none"> ・各種検査(テスト等) ・GIGA スクール構想 ・授業公開・互見授業の展開 ・同僚性の構築 ・OJTの推進 ・キャリアサポートの活用
③組織的な関わり	【学校生活からのアプローチ】 ・「縦割り班活動」の充実。 (教師主導ではなく6年生を軸とした活動展開を支援する) ・学校行事の充実(児童会を中心とした自治的活動の展開) ・自己肯定感に繋がる声かけを行う。 (PDCAのCの際に、結果だけでなく過程をほめ、Aにつなげる)	<ul style="list-style-type: none"> ・朝のドリルタイムの設定 ・補習対策 ・OJTの充実 ・読書の推進 ・読書ノート(記録)の活用 ・6・12月(児童職員)へのアンケート実施評価(C)・改善(A)
	【学力向上からのアプローチ】 ・朝のドリルタイム(漢字・計算)を計画的に実施し基礎基本の底上げを図る。 ・外国語教育を軸とした言語活動を重視した授業改善 ・学習を支える力(学びに向かう学習集団づくり) 授業では、担任対児童、児童相互の「聴き合う」授業を展開する。	
	<div style="border: 1px solid red; padding: 5px;"> <p>参考:学び合い(ペア・グループ学習)の学び方レベル</p> <p>A:相手がどこでつまづいているかを知りアドバイスが出来る。</p> <p>B:相手から先に話させる</p> <p>C:自分の考えから先に言う</p> </div>	

5. 沖縄県や伊江村の学推との連動について



(参考)子どもたちを“座標軸”にした学校づくり -授業を変えるカリキュラム・マネジメント-

県の資料から、「学びの質を高める授業改善」を実施するにあたっては、学校の雰囲気、学級の雰囲気は欠かせない。(図1)また、支持的風土づくりも重要である。

本校が推進する共通実践事項①、②の推進にあたっては、図1、図2を踏まえ推進していく必要がある。

また、それを実践していくことで本村の施策の1つである、「縦のつながりを通した人間形成」が達成できる。

【図2】



沖縄県教育委員会 義務教育課「不登校児童生徒への支援の手引き」より

6. 評価の視点

学力向上には、PDCAが欠かせない。よって、共通実践事項に関する評価 (C) を定期的に行い、効果的な取り組みを共有し (成果を共有) と課題については改善策 (A) を検討し計画を練り直す必要がある。

6月と12月に児童、職員アンケートを実施し、取り組みの進捗状況を確認し改善を図る。

◎共通実践事項 1 ☆質的授業改善を基軸に「学びに向かう児童」の育成を図る。

- ・毎時間の授業において「身につけさせたい力を明確化」することができたか。
- ・毎時間の授業において「何を学ぶか」を明確にし、「どのように学ばせるか」検討することができたか。
- ・毎時間の授業において児童に「振り返り」の時間を確保し、何が身についたのかを見取ることができたか。
- ・児童の振り返りから、「身に付けさせたい力」に関する表記や表現が見られたか。

◎共通実践事項 2 ☆毎日行われている教育活動の価値づけと方向性をそろえる。

- ・授業改善からのアプローチに関する評価・改善案等をまとめる。
- ・学校生活からのアプローチに関する評価・改善案等をまとめる。
- ・学力向上に関する取り組みにおいて、児童の自己肯定感の変容に関する評価・改善案等をまとめる。

7. 各種学力調査等の結果

(1) 令和5年度 全国学力・学習状況調査結果分析報告

学校教育目標		育成を目指す資質・能力		目指す児童生徒像	
自律・創造		これからの社会に対応できる資質・能力		自分で考え決めて行動できる子 根拠や理論をもとに自分の言葉と考えで表現する 考えを深め個性的・独創的な表現ができる子	
<学力調査の状況>				<学力課題との関わり>	
国語				課題の要因と考えられる 質問紙調査の項目	
R4全国学調		R4県到達度(小5)	R5全国学調		
正答率の県差	7.5 P	正答率の県差	1.8 P	正答率の県差	5 P
R5全国学調 課題の見られる問題			問題番号		3三
出題の趣旨		分析・考察			
3年及び5年思考力、判断力、表現力等A話すこと・聞くことE必要なことを質問しながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを中心に捉えることができるかどうかをみる。		敬語表現が理解できていない。「うかがって」という表現を理解できていない子が多く、「お聞きになって」を選んだ児童が多数いる。			
正答率の県との差		10.7 P	無解答率の県との差		5.4 P
算数					
R4全国学調		R4県到達度(小5)	R5全国学調		
正答率の県差	0.4 P	正答率の県差	0.9 P	正答率の県差	6 P
R5全国学調 課題の見られる問題			問題番号		2(4)
出題の趣旨		分析・考察			
〔第5学年〕B 図形(3)イ(ア)高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる。		無解答の児童はいないが三角形の面積の条件である底辺が等しく、高さが同じ幅で等しいため、面積が等しくなるという説明を書く事ができていない。			
正答率の県との差		12.6 P	無解答率の県との差		6.2 P
↓		↓			
共通する課題					
条件に合わせた他人に伝わる表現ができていない。条件作文がうまく書けない子が多い。理解はしていても根拠をもとに書く(アウトプット)することが苦手な児童が多い。自分にはよいところがあると自信をもって言えない児童が多い。先生によいところを認められていると感じている児童が少ない。承認欲求は高い。					
↓					
学力課題に対する組織的取組(学校全体で取り組むこと)					
<ul style="list-style-type: none"> ・2学期スタートしてからの一か月を承認月間とし、全職員が意識して児童のよいところを積極的に認める。 ・条件作文に毎日の日記等で日常的に取り組ませる。テーマも担任で設定する。 ・すべての児童にアウトプットの場面設定を！！ 					

(2) 学びの確かめ分析報告

	学びのたしかめ(6月実施)				全国学調(4月実施)		県到達度調査(2月実施)			
	4年		5年		6年		5年		6年	
	国語	算数	国語	算数	国語	算数	国語	算数	国語	算数
沖縄県	44.6%	41.2%	56.6%	61.6%	65.0%	58.0%	64.2%	58.5%	66.0%	48.2%
国頭地区	39.5%	37.0%	52.9%	59.4%	57.9%	52.6%	60.7%	56.0%	62.2%	44.8%
伊江村	39.5%	31.7%	51.9%	48.8%	54.3%	52.3%	59.3%	57.4%	59.1%	45.2%
西小	36.1%	32.0%	57.9%	54.4%	60.0%	52.0%	63.8%	56.7%	64.5%	43.9%
県との差	-5.1%	-9.2%	1.3%	-7.2%	-5.0%	-6.0%	-0.4%	-1.8%	-1.5%	-4.3%

【分析・考察】2月に実施した沖縄県到達度調査で県平均との差が国語・算数ともに縮まったが、国頭地区平均に満たない学年、教科もある。特に下位群の底上げが急務である。課題となった問題を把握・分析・共有し、補習強化、個に応じた指導法、授業改善の工夫に努める。今後もICTを積極的に活用しながら家庭と連携を図り、確実な学力の定着・学力向上を目指す。

(3) 魅力ある学校づくり分析報告

1、「魅力ある学校づくりパンフレット」が示す「3指標」の項目から、特に自校の課題だと思われる指標をお書き下さい。※指標は、「沖縄県児童生徒質問紙調査」と対応しています。「あてはまる」の回答率もお書き下さい。

課題と思われる指標	「児童生徒質問紙調査」の「あてはまる」の回答率			
	6月		11月	
	自校	県	自校	県
自分には良い所があると思いますか。	27%	45%	27%	44%
先生はあなたの良い所を認めてくれていると思いますか。	27%	56%	47%	56%
あなたの学級では学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いのよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。	22%	41%	29%	40%

(課題と思われる指標の要因)

- ・全学年1クラスのため低学年からずっと同じ児童と過ごす中で、他の児童と比較してしまっている。
- ・いつも良い所を認められている児童と、なかなか認められていない児童に二極化している。
- ・自己肯定感が低い児童が多いため、先生に良い所を認められているという認識が低い。
- ・学級生活をよりよくするための学級での話し合い活動の時間が十分に確保されていない。

<p>(具体的な対応策) ※学校長の描く「学校ビジョン」を踏まえ、「学校経営計画」等を参考にお書き下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各行事 児童が考案、立案、教師はサポートする。 ・教師が語る授業から児童が作る授業へ。教師はしかける。 ・月1回は学級会を開く。テーマはクラスから課題を設定する。
<p>(改善後の、目指す児童・生徒・職員・学校の姿)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会、委員会の活性化。 ・他者意識(相手のことを考える)を育む。 ・こどもたち中心の学校、学級づくり。

2, 今年度の成果と課題、課題への取組を、11月「沖縄県児童生徒質問紙調査」等を参考にお書き下さい。

成 果	■課題 ○課題への取組
<ul style="list-style-type: none"> ・学校全体で「ほめる旬間」を設定したことで児童の「自己肯定感」「承認」等の項目の数値が上がった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学級内での話し合い活動を充実させ、自己有用感や自己肯定感、学級への所属感などを充実したものにし、児童の自己肯定感を高める取り組みを学校全体で行う。

【今年度の成果と課題】

- 成果
- ① OJT形式による授業改善に向けた研究とフィードバックを行うことで教師の指導力向上と授業改善につながった。
 - ② 継続的にキャリア教育を推進したことで児童の目的意識や学ぶ意欲の向上を高めることができた。
 - ③ 授業改善や個に応じた指導、補習等により、児童が自分の目標や課題をもって粘り強く学習に取り組む姿勢が育ってきた。
 - ④ 全国学力・学習状況調査、県学力到達度調査においては、全職員体制で1人1人の学習状況をていねいに見取りながら指導に関わることができた。継続的な検証改善サイクルを確立し、定着確認問題(CBT)を活用し、PDCAサイクルを確実に実施する。
 - ⑥ 伊江島スタンダードをもとに、めあて・まとめ・ふり返りを重視した授業を行うことができた。次年度は児童の「問い」を生かした主体的・対話的で深い学びを計画的に授業の中に取り入れる。
 - ⑥ 学習支援教諭の効果的な活用により、個に応じた学習指導の充実を図ることができた。
 - ⑦ 異学年で構成される縦割り班活動を通して、教師主導ではなく高学年を軸とした活動展開を支援することができた。自ら考え主体的に活動できる児童が増えた。次年度は児童会・委員会活動を中心とした、縦割り班活動の推進を図る。
 - ⑧ 校内研で担任主導による外国語教育の取り組みを行った事で、英検ジュニア（ゴールド・シルバー・ブロンズ）で70%以上の英語力を有している。
- 課題
- ① 授業改善で指導に生かす評価を行い、確かな学力を向上させ児童の学びや変容を自覚させることができるように取り組む。今後も教師主導ではなく、児童中心の授業づくり、授業改善に取り組んでいく。
 - ② 各種学力調査等で目標が達成できていない事項について個別指導を徹底する。
 - ③ 個人差に応じた支援方法について授業改善や指導方法・体制を工夫する。
 - ④ 家庭と連携を図りながら授業と連動した家庭学習の与え方を工夫する。家庭学習の習慣化と内容を充実させる。
 - ⑤ 学びに向かう集団づくりを推進するために、児童の自治的活動を大切にした学級活動や児童会活動の充実を図る。

8. 校内研究の取り組み実践

(1) 研究主題

担任主導による外国語活動・外国語科及び各教科における国際理解教育の推進
～教材の工夫・言語活動の充実を通して～

(2) アンケート結果（児童対象）

外国語に関するアンケート			
令和4年度3学期実施		児童用	
質問項目		肯定的回答	否定的回答
1	英語が好き	60.7%	39.3%
2	外国語の授業は楽しい	77.1%	22.9%
3	英語が話せるようになりたい	83.6%	16.4%
4	授業で積極的に英語を話している	78.7%	21.3%
5	授業で十分英語を話す時間がある	77.0%	23.0%
6	授業の内容を理解しているか	78.7%	21.3%
7	授業以外で進んで英語を使っているか	41.0%	59.0%
8	授業で他の国の文化について学ぶか	73.7%	26.3%
9	外国人との交流（オンライン含む）は好きか	70.5%	29.5%
10	困っている外国人がいたら助けるか	68.9%	31.1%

令和5年度12月実施		児童用	
質問項目		肯定的回答	否定的回答
1	英語が好き	81.5%	18.5%
2	外国語の授業は楽しい	89.8%	10.2%
3	英語が話せるようになりたい	94.5%	5.5%
4	授業で積極的に英語を話している	75.9%	24.1%
5	授業で十分英語を話す時間がある	87.0%	13.0%
6	授業の内容を理解しているか	82.4%	17.6%
7	授業以外で進んで英語を使っているか	67.6%	32.4%
8	授業で他の国の文化について学ぶか	81.7%	18.3%
9	外国人との交流（オンライン含む）は好きか	80.6%	19.4%
10	困っている外国人がいたら助けるか	90.8%	9.2%

考察

英語が好き、話せるようになりたいという情意面はポイント数が上昇したものの、他の項目では前回より若干下がっている。英語の授業における「言語活動」に再度重点化し授業構築を図る必要がある。記述式の回答では、外国人と英語を話したい目的や場面を想定し、英語が好きや英語を学びたいという記述が大幅に増えている。

(3) 担任の成果（○）と課題（●）

1・2年 国際理解教育・異文化理解教育部会

- 図工や生活科など他教科と関連付けて取り組むことで、楽しみながら異文化理解を深めることができた。
- 日頃からALTと担任がコミュニケーションを図り、一緒に授業づくりをすることで、チームとして授業を進めることができた。
- 児童の実態を把握し、支援が必要な児童に対してALTとの役割分担を明確にし、指導にあたる必要があった。
- 学習活動を精選して、子ども達が英語の理解をもとに、アウトプットする場面を授業の中で設定する必要がある。

3・4年 教材開発部会

- 活動の前に教師がモデルを示すことで、児童が活動に入りやすくなっていた。
- 教具があることで、児童に分かりやすく示すことができ、興味関心を惹くことができた。
- タブレットを用いた際、そこでの操作で夢中になるあまり、英語で伝えあう場面の踏み込みが足りなかった。友だちと伝え合うことを強調して児童に意識付けさせればよかった。
- 苦手な児童にあえて役割を与えて、授業に参加できるようにする。

5・6年 指導と評価部会

- 単元のゴールをしっかりと示すことで、子ども達が見通しをもって活動できた。
- 書くことの領域において、教師のモデル文を提示することで、評価基準をはっきりさせ子どもがどんなことを意識すればよいかはっきりさせることができた。
- 語彙力が乏しいため、教師への手助けを求めるのが多くなっていく。ICTの活用など自らいろいろな手段を使ってまずは自分でやってみる姿勢をもたせたい。
- アルファベットの大きさや、四線における位置が定着していないので反復して習得させる必要がある。

9. 学習の支えとなる図書館教育

(1) 学校図書館には、主体的な学びを支える多様な資料が豊富で、豊かな心を育む多種多様な図書が蔵書されている。探究的な学習で図書館資料を使い、学んだことを深め自らの考えとしてアウトプットすることで、主体的な学習活動に繋がる。読書をすることで、読解力や想像力が育成され、自らを律しつつ他人とともに協調し他人を思いやる豊かな心を育む。

①「自己肯定感の高まり」・・・図書委員会、国語科と連携した図書室づくり

図書委員として何ができるか、本好きを増やすためにはどうしたらいいか、図書館アンケートの結果をもとにミーティングを行った。学校を運営する一員として自ら考え楽しい読書イベントを実施することができた。国語の授業と連携した図書室づくりとして、3年生は生きものブック、5.6年生はおすすめの本のポップを作り図書室に展示。手にとることが少なかった本も魅力的に見えて借りる子が増えた。

②「学び・育ちの実感」・・・国語辞典引き会

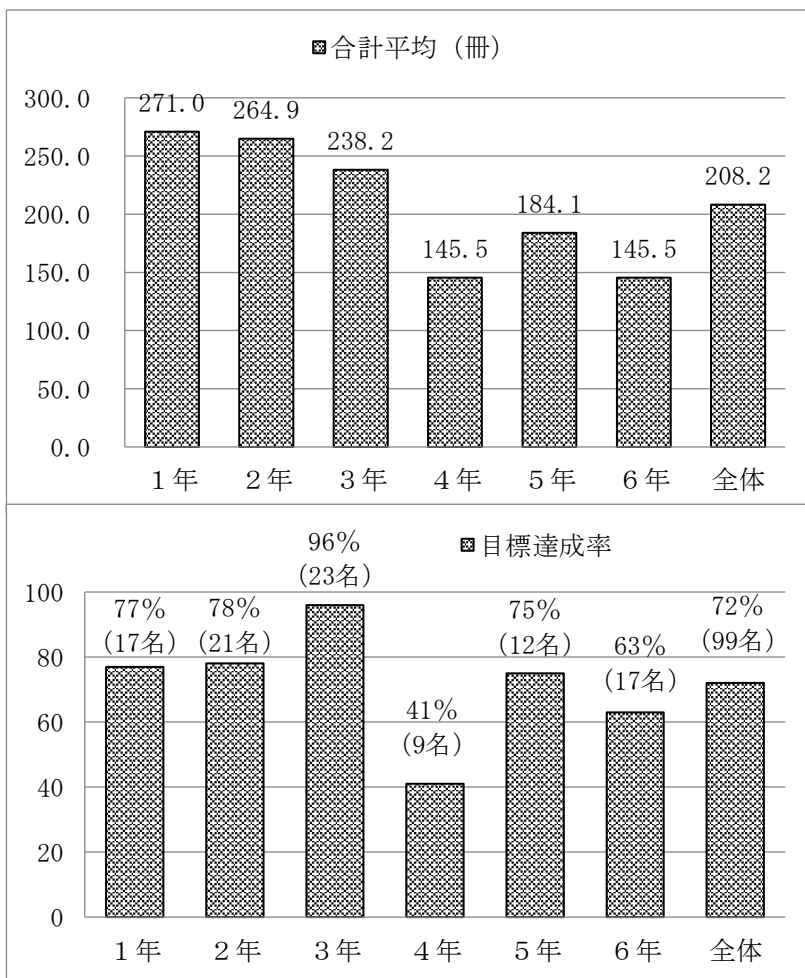
情報化社会の中で確かな情報を得るための情報の探し方や使い方など辞典引きを通して学ぶ。年に数回行う事で自らの成長に気付き、ベストプレイヤー賞として成績だけにとらわれず努力の課程を表彰した。

③「組織的な関わり」・・・幼小連携、ニグスイサークルや先生方による読み聞かせ

幼小連携の取り組みとして、幼稚園児も読書郵便に参加。字が書けなくても絵で表現したり、友達にひらがなを教えてもらったりと努力する姿が見られた。読み聞かせボランティアをしてくださるニグスイサークルの方々へ感謝の気持ちを伝える会を行った。保護者だけでなく地域の方にもご協力をいただいている。

(2) 読書活動の現状

①貸出平均冊数 (R5年4月10日～R6年2月27日までの統計)



【貸出のようす】

- ・高学年は小説などの長編作品をよく読んでいる。
- ・低学年は絵本だけに偏らず、昆虫やスポーツ、料理や工作など様々な分類の本をかりている。
- ・沖縄県の年間読書冊数の平均が110冊なのに対し本校は全体で208冊と大幅に上回っている。(R4年度は平均177冊)
- ・学年によって差があるので、図書室に足を運ぶ習慣づけを指導していきたい。

目標冊数

低学年	中学年	高学年
年間目標 200冊	年間目標 150冊	年間目標 100冊
学期目標 1学期80冊 2学期90冊 3学期30冊	学期目標 1学期70冊 2学期60冊 3学期20冊	学期目標 1学期40冊 2学期50冊 3学期10冊

ほとんどの学年が年間目標冊数を大幅に達成しており、全体では72%の児童が達成している (R4年度は56%)。引き続き目標をもって読書をすることを意識させたい。